

# 白馬の王子様——インドの社長令嬢の結婚式

山中 由里子 (やまなか ゆりこ)

民族文化研究部

う、一五年ほど前のことになる。インドの企業の社長令嬢の結婚式に招待されたことがある。父がとある日本企業のデリー支店におり、その社長と取引があったために、このような千載一遇の機会に恵まれたのだ。当時大学院に入りたてで、インドを研究対象としようとしていたわけではないが、極彩色の国インドの魅力に惹きつけられ「私も行く」と飛行機に乗り、インドに飛んだ。

## も

結婚式の式典がおこなわれたのは中部アディヤ・プラデーシュ州のインドールという都市。そこにその企業家の工場と邸宅があった。

インドの結婚式は、庶民でも借金をしてまで派手におこなうらしいが、お金もちの披露宴は半端ではない。外国から招待された客の旅費、滞在費はすべて花嫁の父がもつてくれたらしい



花婿、白馬に乗って花嫁宅の門をくぐる



天蓋のもと、聖火の前に座る新郎新婦

(私の飛行機代はさすがにうちの親が出してくれたが)。一週間おこなわれたさまざまな行事のたびに、ゼロがならぶ数字が招待客の間でささやかれていた。たとえば、到着日の夕方に案内された学校の校庭には、「町の一人(万人)」に食事をするための巨大バンケットが用意されていた。校庭一帯に張り巡らされたテントではいくつもの大きな鍋が湯気をたてている。それだけで十分に圧倒されたが、VIP客にはもうといひ晩餐が用意されているということで、花嫁の豪邸の庭につくられた祝宴用テントに連れていかれた。生花や壁掛けにぎやかに装飾された仮設ホールでの食事のメニューは、申し分なく豪華であった。しかもステージが設けられており、民族舞踊たの、皿回しなどの余興ありだ。「このテントだけで、円にしても何千万もかかったらしい

豪邸のサロンに設置された花の天蓋の中に聖火が焚かれ、僧侶が契りの儀式を厳粛に執りおこなっている間によくやくあきらめのついた私には、宝石箱をひっくりかえしたような色とりどりのサリー姿の女性たちに気を惹かれ始めた。こんな花婿さんは無理でも、こんな花嫁ドレスは着たい……。

この時はおおいに掻き立てられた「白馬の王子様」と「理想の花嫁ドレス」幻想も、いつしか心の宝石箱にしまわれた。特別展「インドサリーの世界」を機にそと取り出してみたい思い出話である。

滞 在中はとにかくプログラム満載で、花嫁家族が信者であるジャイナ教の寺院や、花嫁の父の工場の見学なども日程に含まれていた。しかし私にとってハイライトだったのは、なんといっても花婿の登場である。

最初のご登場は、ジャスミンの花で飾られたオープンカーに乗って、花婿のお披露日の場へ。横に座った妹さんだかいとこだが、花びらを降りかけている。ムガール朝絵画の王子の肖像を思わせるような、鼻筋のとおつた凛々しい褐色の横顔。「あ、すてき……」。この世のものとは思えない、美しい男性の出現に言葉を失ってしまった。

さらに、婚礼の儀式の晩、花婿はなんと白馬に乗ってやってきた。羽のついた赤いターバンはきりりとした顔立ちをいっそう引き立て、すらりとした体にまとった白いチニツックは清麗かつ高貴な空気をかもしだしている。花嫁もチャームिंगな女性だが、目は花婿にすっかり釘付けである。

わよ」とまた嗜される。